

---

# 奴隷教師始めさせられました

佐志洲 瀬壱

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

奴隷教師始めさせられました

### 【Nコード】

N5263N

### 【作者名】

佐志洲 瀬塑

### 【あらすじ】

社会人三年目の三園<sup>みその</sup> 美邦<sup>みくに</sup>は二流証券会社に勤める平々凡々のサラリーマン。

ある夏の暑い日、仕事を終わらせ、ストレス発散のために同期の沢村<sup>むら</sup> 和馬<sup>かずま</sup>を妬け酒に突き合わせることに成功した。

馴染みの店・大学時代からの友人・翌日が祝日という好条件を揃え、記憶が無くなるまで酒を飲み続けた美邦。

二日酔いのせいで重くなった頭を起こすと和馬宅のフカフカのベッドの上ではなくギシギシと音を立てる拘束具付きの椅子の上で目を

覚ました美邦。

何が起こったのか理解できていない美邦の前に現れたのは国民的ヒーロー。ンパンマンのお面をかぶった中年。

低く、渋く、重い声でアンパンマ はゆっくりと口を開いた。

「三園 美邦君、教師をやってみないかね？」

自堕落な奴隷教師とハイスキル・ハイリスクな生徒たちとのドタバタシリアス？コメディー。

ベタな小説に飽きた方は是非どうぞ。

プログラグが必ずしも爽やかとは限らない(前書き)

爽やかではありません.....

## ブログが必ずしも爽やかとは限らない

「で、俺が何でここにいいのか教えてくれよ、アンパンマ。」

俺こと、三園 美邦はいま非常に機嫌が悪かった。ついでに気分も。

俺は昨日、上司に押しつけられたプレゼンをやったの思いで終わらせ、憂さ晴らしのために同期で営業部の沢村 幸吉と掛かり付けの居酒屋で一杯引つ掛けていた。

酒に強い体質の俺だが、羽目を外しすぎたらしく途中からの記憶が脳内に存在していなかった。

幸い昨日居た居酒屋は顔馴染みであるから多少のヤンチャは『馬鹿だなあ。』と笑って見逃してくれるだろうし、沢村は俺よりもアルコールに耐性があるし俺よりも飲んでいなかったので無事に俺の家だか沢村の家だかに連行されるだろうと高を括っていた。

翌日は幸いにも土曜日なので二日酔いの頭でデスクワークに追われることもない。

そついう風に打算的に計算をした俺は浮遊感に包まれながら眠りに落ちた。

そして目を覚ますと面倒くさそうな顔をする沢村に介抱されてゆつくりと二日酔いを覚まして帰る、というのが俺の打ち立てた計画だった。

飲みすぎによる吐き気によって眠気を除された俺を待っていたのは爽やかなイケメン、沢村と客室にあるフカフカのベッドではなく俺の家にあるテレビの数倍はある大きなディスプレイに映った国民的自虐ヒーローであるアンパマンのお面を被る推定五十歳のおっさんと革張りの椅子に手足を縛りつけられている俺だった。

重たい沈黙が数巡し、アンパンマンはお子様が聞くには低すぎる声で話しかけてきた。

「君が三園 美邦君でよいきやな？」

「.....」

「君が三園 美邦君でいいかな？」

噛んだ。

盛大に噛んだ。

恥ずかしそうに頬を掻いてるのがかなりうつとおしいけど今はそんなことは後回しにしよう。

社会人なら質問されたら答えるのが礼儀である。ゆえに俺は口を開いた。

「いいえ、違います。人違いです。」

吐き気を抑え込んでいるせいで若干声が低くなってしまったけど、そんなことは気にしない。

「そうか。それで三園君、私は君にお願いがあつて……、え？今なんて言った？」

「だから人違いです。俺はその三園 なんとらんたらつていう人じゃありません。なので家に帰してください。監禁で訴えるぞ、アンパンマ」

俺の返答が予想外だったらしく『え？え？じゃあコイツ誰！？』と混乱しているお面ヤロウ。

まあ本当は正解だけどあからさまに嫌な雰囲気だったので嘘をついた。

口八丁バンザイ。

アンパンマ は意外と応用力がなかったらしく未だに混乱している。湧き上がってくる吐き気と眠気をかみ殺しているとディスプレイが切れてしまった。

はあ、そろそろ帰りたいんだけどなあ。眠いし、気持ち悪いし……  
……

なんて考えながら次のアクションが起きるのを待っていると再びディスプレイが開いた。

「嘘をつくことはよくないことだよ、三園 美邦君。私には確かな証拠があつて……」

「はあ、つつぷ……」。



プロローグが必ずしも爽やかとは限らない(後書き)

主人公が初っ端からリバースするって・・・  
自分で書いていてどうかと思いました・・・

ブログが必ずしも穏やかとは限らない(前書き)

週一更新を目標に頑張っていきたいと思えます。

誤字・脱字がありましたら教えていただけると幸いです。

## プロローグが必ずしも穏やかとは限らない

「ううう……………、なんで私がこんなことを  
しないといけないんだ……………。……………一応偉い人なのに。」

いくらか気分の良くなった俺は涙声になりながら俺の吐いた  
を片づけているアンパン　ンをなんとも言えない面持ちで眺めて  
いた。

切ないなあ、なんか。

自分の　　を他人に片づけてもらうというのは思った以上に切  
なかつた。

「なあ、アンパ　マン。自分の　　くらい自分で始末するから、  
この手錠と足枷外してくれよ。」

この部屋は外側から鍵をかけるタイプのものらしく、　　を出  
してからアンパ　マンが入ってきた入口(?)は引き戸なのに、内  
側にはカギ穴はおるか持ち手すらない。

その上部屋の壁紙はシミ一つない真っ白で精神病院のようで落ち着かない。

そして部屋には手錠・足枷によって拘束された二十歳過ぎの男とアンマンのお面をかぶった男。

シユールすぎる。

それならまだ白衣を着た研究員に囲まれたほうが落ち着く気がする。

なんて考えているとアンパンマンは新聞紙に含ませながら涙声で口を開いた。

「絶対に嫌だ！！確かに他人のを片づけるのはきついけど……、でも手錠と足枷外したら絶対に逃げるだろ！！」

「逃げたりしませんよ。俺が今までアンパンマンから逃げたことが一度たりともありませんか？」

しばらく考える素振りをしてから首を横に振った。

「だろ？人が一緒にいるうえで一番大切なのは信頼関係だと俺は思

うしアンパンマ だってそう思うだろ？そして信頼関係はお互いの行動によって形成されていくものだ。な？」

「う、ん。まあ、そうだな、確かに。」

「そして俺は君から逃げたことがないという相互信頼に足りうる実績を持っているわけだ。しかし君はどうだろうか。いくら君と俺が友人だからといって無断で拉致する、というのはいささか乱暴すぎではないかな。これでは相互信頼にはならない。」

俺の話を聞くアンパンマ の肩が僅かに下がったような気がする。

それを確認した俺は流しこめると踏み、いつものように押し流すことにした。

「しかし、俺は君のことを友人だと思い、慕い、信頼しようとしている。そこで大切なのは君のこれからの行動だ。俺は別に『この部屋から出せ』とか『俺を拉致してきたところに帰せ』、と言っているわけじゃない。ただ、この手錠等を外してほしい、と言っているだけだ。俺と君は友人であり、この部屋から出る術がないことは分かっている。ならば君の権限だけでも俺を助けることはできるだろ？」

アンパンマンは何も言わない。

でも俺にははっきりとわかる。

もう少しだ。

あと少しでこいつは落ちる。

眼と眼を合わせて話されれば、誰だって心は傾く。

後は簡単だ。足を引っ掛けて、扱かせて、起き上がる前にセットポジションを取る。

それからさっさと抜け出す方法を聞いて連行すればいい。

逃げる算段を立てた俺は本日最高の笑顔を　ンパンマンに向ける。

アンパ　マンの心の中では葛藤が起きているらしい。

でも俺には分かる。

次にこいつが口を開いたときは肯定が出てくる。

そしてついにアンパン（ガイド）は口を開いた。

「ガゲボオオオ!?」

奇声と一緒に地面に熱烈なキスをかますアンパンマ。

「まったく、自分がカモになりやすいから絶対に一人では行動するな、とあれほど警告しておいたのにこのザマですか。……はあ、千回ほど地獄に落としたほうがいいのかしら。」

アンパンマ（あわれ）に蹴りを入れたのは銀縁のメガネとカジユアルなスーツに身を纏った麗人だった。

アンパンマ（あわれ）の腰を踏みつけながら、値踏みをするように俺を見てくる彼女。

そしてため息を一つ。

「三園 美邦はサラリーマンのはずだったよね。まったく、あの穀潰し半社会不適合者なんだから、せめて自分の仕事くらいはきっちりこなしなさいよ。こんな詐欺師バカが捌けるわけないでしょうが。」

「

そつ言つてておらにもつーつ溜め息を吐いた。

プログラグが必ずしも穏やかとは限らない(後書き)

初っ端から人を口車に乗せる主人公って……

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5263n/>

---

奴隷教師始めさせられました

2010年12月17日02時14分発行